

『ナーシサス号の黒人』の政治性と 19世紀末イギリス労働運動

伊藤正範

1. ドンキンの反乱と小説の政治性

ボンベイを出港して一路ロンドンへと向かう帆船において発生する暴動は、ジョーゼフ・コンラッド『ナーシサス号の黒人』(Joseph Conrad, *The Nigger of the "Narcissus,"* 1897)の政治的ポジションを明確にすることにおいて大きな役割を果たしている。暴動のそもそものきっかけは、病に伏す黒人船員ウェイト (Wait) に対する船長アリスタン (Allistoun) の冷酷な処遇である。体調悪化のために船上での労役を免除され、病室代わりにあてがわれたキャビンで悠々と寝起きしていたウェイトは、ある日、狂信者じみたコックのポドモア (Podmore) に死を予言され、それに反発するように回復と職務への復帰を宣言する。しかしそうしたウェイトに対してアリスタンは仮病との推断を下し、ロンドン到着以前に甲板上に出てくることを禁じながら、「お前は給金の支払いカウンターにもう十分に近くなったと考えているのだろう」(“You think you are near enough to the payable now”)と冷たく言い放つのである(120)。アリスタンの一連の言動は他の船員たちの不評を買い、船上にはにわかに不穏な空気が漂いはじめる。若い船員たちが口々に船長を非難する中、ナーシサス号上に響くのは、船員ドンキン (Donkin) の「俺たちは機械だっただけか？」(“Are we bloomin’ masheens?”)という叫びである(121)。

このドンキンという人物は、「ほとんどのことができなくて、それ以外のことはやろうとしない」(“The man who can’t do most things and won’t do the rest,” 11)という語り手の言葉に端的に表されているとおり、無能なことに加えて勤労意欲に著しく欠ける船乗りである。そして、「自分の権利についてはあらゆることを知っているが、勇気や忍耐、信義、そして船の仲間を結びあわせる暗黙の忠義心については何も知らない」(“knows all about his rights, but knows nothing of courage, of endurance, and of the unexpressed faith, of the unspoken loyalty that knits together a ship’s company,” 11)と語り手が揶揄するように、自らの労働者としての「権利」についてだけは人一倍の固執を見せる。

ナーシサス号上での反乱を主導するのはこのドンキンである。「やっちまえ、あたりは暗いぞ！」(“Go for them . . . it’s dark!”)というかけ声とともに他の船員たちを煽りながら、彼はビレーピンと呼ばれる鉄製の船具を、船長と航海士たちに向かって放り投げる(123)。この騒動は、しかしながら、さらに別のビレーピンを投げようとするドンキンを

他の船員が平手打ちし、「俺たちはそういう輩じゃあないんだ！」（“We ain't that kind!”）と叫んだことをきっかけに終息を迎える（123）。そして翌朝の点呼の際、アリストンは、昨晚のビレーピンをポケットから取り出すと、犯人と見定めたドンキンに向かってもとの場所へ戻すよう屹然と命じ、拳を振り上げる。他の船員たちの眼前でしぶしぶ命令に従うドンキンのみじめな姿は、彼の敗北をさらに決定的なものとする。こうして闇夜の反逆は陽光の下に回収され、船の秩序は船長の統率力によって無事に取り戻されるという筋立てである。

このエピソードを通して現れてくるドンキンの人物像に、19世紀末イギリスにおける社会主義者や労働運動家に対するコンラッド自身の政治的姿勢が表明されていることは、これまで多くの批評家によって指摘されてきた。ジャック・ベアトゥー（Jacques Berthoud）は、ドンキンにビレーピンを戻させるというアリストンの命令によって、ビレーピンが「飛び道具」（“a projectile”）ではなく「船の装備における機能部品」（“a functional part of the ship's equipment”）であることが再確認され、結果として船上で必要とされているのがドンキンのような「工作員」（“agent provocateur”）ではなく、自らの職務をまっとうする忠実な船員であるという信条が明示されていると論じる（36）。また、イアン・ワット（Ian Watt）は、コンラッドがユートピア主義や社会主義などの改革的思想に対して完全に敵対していたと指摘しながら、ドンキンが「労働者階級の団結心を動員して平等と正義を達成しようという社会主義者の試みに対する、コンラッドのいくぶん凝りすぎたパロディ」（“Conrad's somewhat overwrought parody of the socialist attempt to achieve equality and justice by mobilising working-class solidarity”）であると分析する（110）。セドリック・ワッツ（Cedric Watts）も同様に、「社会主義の偽善的スポークスマン」（“a hypocritical spokesman of socialism”）としてのドンキンの役割の中にコンラッドの政治的示唆が明確になると主張する（xvii）。さらにエイヴロム・フライシュマン（Avrom Fleishman）によれば、ドンキンは「当てこすりのためだけに」（“only for sarcasm”）存在する登場人物であり、「デマゴグとしての性格づけがなされたドンキンを通して [...] 物語の『客観的相関物』にとって過剰とも言える政治的嫌悪が表明されている」（“The attribution of demagoguery to Donkin . . . expresses a political animus that seems excessive to the ‘objective correlative’ of the story”）という（130）。

こうした議論においては、テキストにおける政治的偏向と作家自身の政治的姿勢とが直接的なつながりをもつことが前提条件となっている。実際、コンラッド自身が社会主義批判をたびたび繰り返していたことはよく知られた事実である。例えば、書簡において彼は、当時の労働者階級を「新しく選挙権を得た間抜けども」（“newly franchised idiots”）と揶揄したり、社会主義の振興に際して「この社会民主的な思想の急成長を止める者はどこにいるのか」（“Where's the man to stop the rush of social-democratic ideas?”）と当てこすったりしている（“To Spiridion Kliszczewski” 15-16）。

そうした事実に加えて、『ナーシサス号の黒人』出版時の背景もまた、テキストの政治性を取り上げる批評家たちによって注目されてきた。この小説が初めて世に出たのは、『ニュー・レビュー』(*New Review*)という文芸誌を通してであったが、実はコンラッドは、この雑誌に自らの小説を連載することに強い思い入れを抱いていた節がある。後の書簡において、『ナーシサス号の黒人』は「[ヘンリー]を念頭に置いて書かれたもの」(“written with an eye on [Henley],” “To the Chairman” 115)であると告白しているとおりでとすれば、コンラッドは、小説の執筆段階から、当時の『ニュー・レビュー』編集者であったW・E・ヘンリー(W. E. Henley)を強く意識していたのである。

ヘンリーは、複数の文芸雑誌の発刊を通して1890年代のイギリス文壇に大きな影響力を持っていた人物であり、実際、R・L・スティーヴンソン(R. L. Stevenson)、ラドヤード・キプリング(Rudyard Kipling)、H・G・ウェルズ(H. G. Wells)などといった当時の人気作家を数多く見出し、パトロンとして、また自身の編集する雑誌への掲載を通して支援していたことでも知られていた。そのヘンリーは、同時に、ラディカルなトーリー主義者としても名を馳せていた。特に左翼思想に対しては極端なほど敵対的で、そうした政治的姿勢が彼の編集方針に色濃く反映されていたことは、当時の『ニュー・レビュー』に掲載された労働者階級出身の政治家を批判する匿名記事を見てもわかる。

Why should I be asked to help them to office, and pay taxes to relieve their poverty, who have my own bread to earn, and who fear them as I do the gates of hell? What interest have I, who want to see the country governed with dignity and spirit, and to have justice, protection, and liberty in my lawful occasions, in seeing power over me in the hands of second-rate Lawyers and Workmen who have shirked their trade? (“The Interest of the Lieges” 611)

ラディカルな保守主義によって色づけされた、この労働運動家・社会主義者批判は、まさにドンキン——仕事を怠けることにかけては彼の右に出るものはない——を名指ししたものの、と言っても過言ではない。あるいはコンラッド自身がそのようにドンキンを作り出したと言ってもよいかもしれない。

トッド・ウィリー(Todd Willy)は、ヘンリーと彼を取り巻いていた一連の政治的偏向に取り入ることこそがコンラッドのまさに目指していたものであると主張し、『ナーシサス号の黒人』には「ヘンリーが偏愛していた政治的・文学的姿勢のほとんどすべてが反映されており、明らかにヘンリーイズムへの大々的な追従と言ってよいものができるがっている」(“nearly all of Henley’s most cherished political and literary postures are so mirrored as to constitute what is unmistakably a flattering of Henleyism writ large”)と論じる(164)。ピーター・D・マクドナルド(Peter D. McDonald)もまた、ウィリー同様、『ナーシサス号の

黒人』の保守的姿勢におけるヘンリーの影響を指摘した上で、「小説による社会主義運動や労働運動への攻撃においてドンキンが焦点としての役割を果たしている」(“Donkin serves as the focus of the novella’s attack on Socialism and the Labour movement”)と論じ、彼の人物像の提示を通して小説の政治性とヘンリー・サークルの政治性とが完全に一致していると主張する(63)¹⁾。

しかしながら、そうした試みにおいて見出されてきたテキストの政治性とは、実は、『ナーシサス号の黒人』全体を覆いつくす多面的な政治性のほんの一面にすぎない。従来の研究において決定的に見落とされてきたのは、テキストに散りばめられた種々のエピソードが、互いに干渉し合うことによって、複雑な政治的地図を形成しているというこの小説の特徴である。『ナーシサス号の黒人』の政治性を正しく評価するための最初のステップとして、私たちはまず、反乱のエピソードを、それに先立つ嵐のエピソードとの関連に焦点を当てながら分析していかなければならない。

2. 嵐とビレーピン

ボンベイを出港してロンドンへと向かうナーシサス号に襲いかかった猛烈な嵐は、瞬く間に帆船の船体を横倒しにし、死にものぐるいでマストにしがみつゝ船員たちを海にふるい落とそうとする。パニックに陥った船上に、「マストだ！切れ！切れ！」(“The masts! Cut! Cut!” 58)という怒声が響く中、アリスタンは船員たちの早まった行動を冷静に制止し、年老いた熟練の船乗りシングルトン(Singleton)は、吹き付ける風雨に耐えながらただひたすら舵輪を握り続ける。その間、船員たちは力を合わせてキャビンの底に閉じ込められていたウェイトを救出し、コックのポドモアは絶望的なほどに損壊したキッチンで奇跡のコーヒーを作り、不眠不休の船員たちをねぎらう。やがて舵が効きはじめたことに気づいたシングルトンが叫び声を上げると、それに応じた船長の操船命令によって船は奇跡的に立ち直るといふ筋立てである。

船員たちの自己犠牲と「団結心」(“solidarity”)、船長の冷静かつ的確な判断力、そしてそうした船長に対する船員たちの忠誠心は、英雄譚的な色合いを物語に持ち込み、汽船が

1) もっとも、パトロンのT・フィッシャー・アンウィン(T. Fisher Unwin)宛の手紙において、「時給10ペンスより少ない賃金で働くゆとりがない」(“I can’t afford to work for less than ten pence per hour,” “To T. Fisher Unwin” 308)と訴えているところからは、コンラッドが、単純に著作料へのこだわりから『ニュー・レビュー』への掲載を熱望していた可能性も読み取れる。さらに、ヘンリーへの「大いなる賞賛」(“a great admiration”)を口にした直後、小説の「大衆的成功」(“popular success,” “To T. Fisher Unwin” 329)への希望を語っているところからは、ヘンリーの政治性に同調したというよりは、小説家としての成功を夢見るコンラッドが、同時代の有名作家を次々と世に送り出していたヘンリーとの関係を切望していた様子も見取れる。だが、エドワード・ガーネット(Edward Garnett)宛の書簡にある「ヘンリーを征服したのだから、もう悪魔そのものだって怖くはないさ」(“Now I have conquered Henley I ain’t ’fraid of the divvle himself,” “To Edward Garnett” 323)という言葉は、『ニュー・レビュー』における掲載が、当時のコンラッドにとって大きな意味を持つものであったことを証明している。たとえそれが演じられたものであったにしろ、コンラッドには、自らの小説の政治性をヘンリー・サークルのそれと同調させるだけの十分な理由があったのである。

台頭する19世紀末の大海原に取り残された帆船ナーシサス号を、船乗りたちのロマンティックな試練と勝利の舞台へと変える。海という無慈悲かつ巨大な自然と小さな人間との闘いを描いたこのエピソードは、『海の鏡』(The Mirror of the Sea, 1906)において展開される、コンラッド自身の船乗りとしての経験を通した人間観を忠実になぞったものでもあり、プロットの点におけるばかりでなく、作品の主題としてもテキストの中心に位置していることは、これまで多くの批評家が認めてきたとおりである。

その一方で、この嵐の場面が単なる人間のドラマばかりでなく、反乱の場面と同様の、あるいはそれ以上に明確な政治性を擁していることは、これまであまり注目されてこなかった。例えば、死と再生の象徴としての嵐に直面することを通して「真の団結心」(“true solidarity,” 105)が示されると論じるロバート・ハンブソン(Robert Hampson)も、嵐の場面において示される「団結心」こそが「この本における最も力強く永続性のある経験」(“the most powerful and enduring experience in the book,” 116)であると論じるワットも——ワットは1896年に『団結心』(La Solidarité)という本で話題になったフランスの政治家レオン・ブルジョア(Léon Bourgeois)にまで言及しているのに——結局のところ、嵐の場面と、そこで提示される「団結心」に込められた政治的含意に大きな関心を払うことはない。

だが実際、この場面の注視を通して見えてくるのは、ある種の明白な政治的バイアスである。吹き荒れる暴風雨の中、死にものぐるいの奮闘を続ける船員たちの足下でだらしなく伸びているのは、かのドンキンである。その彼に対して、船長のアリスタンは持ち場に返るよう強く迫る。

We heard him [Allistoun] say with violence to Donkin, who sprawled abjectly on his stomach,—“I will brain you with this belaying pin if you don’t catch hold of the brace,” and that victim of men’s injustice, cowardly and cheeky, whimpered:—“Are you goin’ ter murder us now,” while with sudden desperation he gripped the rope. (86; emphasis added)

ビレーピンを手にした船長に「殴る」と脅された「人間の不公正の犠牲者」が、弱々しい声で「俺たちを殺そうってのか」と言いながらロープをつかむ描写に、新世代の労働運動家を、冷笑とともに船員たちの共有する「団結心」から除外しようとする力学が働いていることは明らかである。つまりこの嵐のエピソードは、勃興する労働運動や社会主義思想を拒絶することによって封建的な共同体ヒエラルキーへの礼賛を提示するという点において、これ以上ないほど明白かつ一貫した政治的メッセージを擁しているのである。

しかし、そうした政治的メッセージとコンラッド自身の社会主義批判とのあからさまな合致から、結論へと急いではならない。反乱のエピソードと同様、嵐のエピソードも、確かにそれ自体で見れば単純かつ明確な政治性によって支配されているように見える。だ

が、『ナーシサス号の黒人』における各々のエピソードは、何らかの共有する要素を介して互いに干渉し合うことによって、伝記的作者によって公言された姿勢と必ずしも一致しない複雑な政治性をテキストにもたらしめているのである。

例えば、反乱の場面においてドンキンが投擲するビレーピンは、この嵐の場面においてすでに登場した小道具である。そしてそれは、反乱翌朝にビレーピンを「飛び道具」ではなく「船の装備」として皆に示すことになるアリストン自身によって、すでに「武器」として用いられているのである。確かに船の秩序を維持するためではあるものの、「装備」としての使用法を最初に逸脱したのは、ドンキンではなくむしろアリストンなのだ。言い換えれば、反乱の場面におけるビレーピンを投げるというドンキンの行為は、先行する嵐のエピソードにおいて前景化された労使にまつわる不正行為への、的を射たレスポンスとなっているのである。また、逆から言うと、ビレーピンは、自然を相手にした人間の共闘物語というロマンティックな絵画に埋め込まれた^{アナモルフォーズ}歪像であり、反乱の場面と予示的に結びつくことで、一見シンプルに見える船員たちの試練と勝利の物語が、実は19世紀末の労働者を取り巻く現実と密接に結びついたものであることを思い起こさせる警告^{メメント}としても機能している。

前述のように、コンラッドがテキストにおいて懐古主義的な政治姿勢を示そうとしているのは確かであろう。その一方で、彼にとってそれは、ナーシサス号という現実世界から隔絶された^{マイクロコスム}小宇宙においてのみ実現されるものであってはならないのである。だからこそ彼は、古めかしい海の冒険物語に、今まさにイギリス全土を席卷している労働運動を持ち込むことによって、現実社会との整合性を図ろうとする。だが、そうした試みにおけるコンラッドの過度の誠実性は、同時に、現実社会におけるさまざまなノイズをテキストの中に拾い上げてしまう。最終的に、懐古的な政治姿勢の表明が、単に勃興的な社会思想を否定することによって成し遂げられるほど簡単なものではないという洞察に、あるいは人間存在を一貫した政治性に従属させることなど不可能なのだというジレンマに行き当たるのである。この議論を展開していくためには、嵐のエピソードと反乱のエピソードとが共有するもう一つの要素である、19世紀末の労働者が獲得しつつあった〈声〉を取り上げていく必要がある。

3. 血に飢えた船上の反乱者から労働運動家へ

ナーシサス号が進む19世紀末の大海原において、反乱は決して珍しいものではなかった。より正確に言えば、反乱そのものは長期航海船舶の歴史とともにあったと言っても過言ではない。16世紀後半にイギリスで最初の世界周航を果たし、スペインの無敵艦隊を破った海軍提督フランシス・ドレイク（Francis Drake）や、17世紀初頭に北西航路の開拓を夢見たヘンリー・ハドソン（Henry Hudson）といった名だたる探検家たちも、自らの乗

組員の手による暴動を経験したり、またそれによって命を落としたりもした (Dear and Kemp 175, 270)²⁾。

イギリスの船舶史上最も有名な反乱は、軍艦バウンティ号 (*Bounty*) 上で1789年に発生したものであろう。このころになると船舶の役割もだいぶ異なってくる。もはや航海は新しい世界を切り開くための「探検」の手段ではなく、すでに獲得した植民地と本国との間を定期的に結ぶ、貿易の手段としての意味合いが大きかった。バウンティ号もまたもともと商船として運用されていた船舶であり、武装を施されてはいたものの、反乱当時はプランテーションに従事する奴隷への食料供給のため、タヒチから西インド諸島にパンノキの苗木を運搬する途中であった (Dear and Kemp 61-62)。『闇の奥』 (*Heart of Darkness*, 1902) にて少年時代のマーロウ (Marlow) が夢見た、「地図上の空白」を埋める冒険の時代は終わり、もはや船舶はあらかじめ描かれた地図上の道筋を忠実にたどる輸送手段にすぎなかったのである。

しかしながら、少なくとも修辭的な観点からは、冒険と反乱の時代は19世紀後半に至るまで続いていた。そのことは、商船キャスウェル号 (*Caswell*) 上で1876年に起こった、ギリシャ人とマルタ人の船員たちによる反乱をめぐる新聞報道に見て取ることができる。例えば、当時の『ペニー絵入り新聞・絵入りタイムズ』 (*The Penny Illustrated Paper and Illustrated Times*) では、暴動の経緯がある特徴的な語彙をもって提示される。

To brutal and untaught minds the safest course seemed to be to constrain the carpenter to promise with an oath, taken on his knees among the blood that covered the decks, that he would aid his new masters in every adventure.

The savage temper of the Greeks now displayed itself daily. Without any other project than the absolutely absurd one of taking the vessel into the Mediterranean, and setting up as pirates in the islands, they yet hankered after the blood of the English.

The English had the advantage of the situation, as Nicholas and Penno had to fire at random from within the cabin. As they could not take aim they were obliged to venture up stairs, and were beaten down from above with the blows of the carpenter's tools. The record of the fight is rather obscure as it reaches us; but it is creditable to the courage of the English sailors that, with such rough weapons as came to hand, they should have conquered ruffians in possession of firearms. ("The Caswell Mutiny" 339)

2) もっともドレイクの経験した暴動は、当時の大蔵卿の手引きによって引き起こされた政治的陰謀だったとも言われる。Dear and Kemp 175 参照。

船大工が「血に染まった甲板」の上で「新しい主人たち」を「あらゆる冒険において助ける」と誓わされている様子、海賊になろうという目論見の反乱者たちが「イギリス人船員たちの血」を渴望する様子、そして「イギリス人船員たちの勇気」が「手近にあった粗末な武器」——船大工の持っていた斧などの大工道具——をもって、銃を乱射する反乱者たちを制圧した様子の描写を支配しているのは、明白な海洋冒険小説の語彙である³⁾。

例えば、R・L・ステューブンスンの『宝島』(R. L. Stevenson, *Treasure Island*, 1883)において、海賊の宝をめぐる船長や主人公の少年たちが対峙するのは、仲間の殺害をも厭わないほど残忍な反乱船員ジョン・シルバー (John Silver) とその仲間の船員たちである。両陣営の相違は、勇敢さと廉直さを兼ね備えたイギリス人主人公たちと、イギリス人でありながらも「イギリス人らしくない」(“un-English,” 50) ことがたびたび強調されるシルバーとの対比によって明確化される。同様のゼノフォビアは、ジョージ・マンヴィル・フェン『おーい船だ!』(George Manville Fenn, *Sail Ho!* 1893) においても観察できる。主人公の少年が乗り組む商船で反乱を起こすのは、イギリス人とフランス人との混血の船員なのである。いわば、大英帝国が拡大期から安定期へと移行し、少年マーロウが夢見た「冒険」がすでに現実の商業活動に取って代わられていた19世紀後半においてもなお、船上の反乱とは——ジャーナリズムにおいてもフィクションにおいても——イギリスという想像の共同体が夢見るロマンスへの外部からの侵入物であり、鎮圧・回収されることによって想像の共同体を強化するための舞台装置だったのである。

しかしながら、『ナーシサス号の黒人』においてドンキンが企てる暴動は、明らかに別のところからやってきている。そもそもドンキンは、自身が誇らしげに宣言するように、生粋のイギリス人である⁴⁾。そして、この小説におけるゼノフォビアは、むしろ反乱の首謀者である彼を通して顕現する。例えば、ドンキンは、ワミボウ (Wamibo) というロシア系フィンランド人に対して「オランダ人め」(“Dutchy”) と侮蔑の言葉を投げつけながら、他の船員たちに向き直ってこう続ける。

“Those damned furriners should be kept under,” opined the amiable Donkin to the forecattle. “If you don’t teach ’em their place they put on you like anythink.” He flung all his worldly possessions into the empty bed-place, gauged with another shrewd look the risks of the proceeding, then leaped up to the Finn [Wamibo], who stood pensive and dull. —“I’ll teach you to swell around,” he yelled. “I’ll plug your eyes for you, you blooming square-head.” Most of the men were now in their bunks and the two had the forecattle

3) こうした船上の暴動の際に反乱者がまず確保するのは、斧やのこぎりなどの武器になりうる大工道具と、それを管理する船大工であった。

4) 以前に乗り組んでいたアメリカ船において自らの「権利」に固執したために、「ヤンキーども」(“Yankees,” 11) からひどい虐待を受けたという彼は、「俺はイギリス人だ」(“I am an Englishman, I am,” 12) と声高に宣言する。

clear to themselves. The development of the destitute Donkin aroused interest. He danced all in tatters before the amazed Finn, squaring from a distance at the heavy, unmoved face. One or two men cried encouragingly: “Go it, *Whitechapel!*” settling themselves luxuriously in their beds to survey the fight. (13; emphasis added)

「でくのぼう」(“square-head”)という語は、ドイツ人、オランダ人、スカンジナビア人移民を対象にした侮蔑語であり、先の「オランダ人め」という罵りと併せて、「くそつたれの外国人ども」(“damned furriners”)を十把一絡げに嫌悪するドンキンの外国人観をよく表している。

では反乱者としてのドンキンは一体どこからやってきたのか。上記の場面において他の船員に「ホワイトチャペル」と呼ばれていることから推測できるように、また初登場時に、語り手が侮蔑を込めて「スラムの下劣な自由から生まれ出た自立の申し子」(“The independent offspring of the ignoble freedom of the slums,” 11)と揶揄していることからわかるように、まともな衣類すら持たずに乗船してきたドンキンは、ロンドンの貧困層を体現する人物なのだ。言い換えれば、冒険時代の反乱者が外部からやってきた侵入者であったのに対して、『ナーシサス号の黒人』における反乱者はイギリスの内部からやってきたものなのである。

コンラッドは、海の物語において慣習的ともいえる反乱を描くに当たって、どうしてこのような書き換えを行わなければならなかったのだろうか。それは、キャスウェル号事件と同年の1876年に発生したロックスリー・ホール号(*Locksley Hall*)事件の経緯を辿ると見えてくる。この事件では、仕事を忌避した上に一等航海士に危害を加えたという理由で一ヶ月半にわたって足枷をはめられた船員が、ロンドン到着後の裁判において反訴した結果、船長自身が治安判事によって禁固21日の有罪判決を言いわたされるという異例の展開を見せた(“Police” 12)。この結末は大きな反響を呼び、特に船長職に就く者たちからは批判の声が噴出したが、当の船員がわずかに禁固2日の刑ですんだという事実から見えてくるのは、当時のイギリス社会において、不当な労使関係に対する社会的な意識が、少なくとも司法に影響を与えるほどにまで成長していたということである。

そしてそうした徴候は、ロックスリー・ホール号事件の17年後、1893年に起こったウォッチマン号(*Watchman*)事件においてより顕在化する。船長のたび重なる暴行によって病気の船員が死亡したこの事件に際して、当時の『レイノルズ新聞』(*Reynolds's Newspaper*)には次のような投稿記事が寄せられている⁵⁾。

5) 日曜紙である『レイノルズ新聞』は、進歩的リベラル思想と急進主義を支持し、低層中産階級と労働者階級において多くの読者を獲得していた。創設者のジョージ・レイノルズ(*George Reynolds*)はチャーティスト(人民憲章)運動の支持者である。Curtis 109-10、Wiener 60 参照。

It is, of course, necessary that a captain of a ship should have control over his crew, and that he should in a measure be able to punish insubordination which, if not suppressed, might lead to mutiny. As a fact, however, I believe that the majority of cases of insubordination and mutiny have been caused by gross ill-treatment on the part of superior officers at the outset. . . . In small sailing ships going long voyages officers have before now been guilty of shocking acts of tyranny, and even murder; but the facts have never come out, because the crew have been too frightened to tell what they knew. (“The Sailor’s Hard Life” 2)

ここにおいて示唆されるのは、過去の船員による不服従や暴動が、船長や他の上級船員による理不尽な虐待行為に対する対抗手段として引き起こされてきた可能性、そして他の船員たちが報復を恐れて口を閉ざしたために、そうした事実が闇に葬られてきた可能性である。そして何よりも特徴的なのは、この記事そのものが、そのようにかき消されてきた〈声〉のほかならぬ代弁となっている点であろう。背景には、続く部分において、労働者の環境改善を後押ししていくであろうと記事が指摘する「労働組合の拡大」(“the spread of the Union”)が見えてくる。

1870年代まで地域的かつ小規模なものにとどまっていたイギリスの労働組合は、1880年代に入ってから急速に全国的な組織化を進行させ、1890年代の前半にかけて、多種の職業間をまたがる統合的な組合を次々と誕生させていった (Pelling 24-27; Coates and Topham 109-10)。船員のための初の全国的組織、「全国合同船員・消防士組合」(National Amalgamated Sailors’ and Firemen’s Union) が設立されたのも1887年であり、当時の『デイリー・テレグラフ』(Daily Telegraph) には、「すべての船乗りたちの状況を改善するために」(“to improve the condition of all classes of seafaring men”)、特に「道理にかなった労働時間と正当な賃金を獲得するために」(“to obtain reasonable hours of duty and fair rates of wages”) 邁進するという組合の理念が引用されている (Marsh and Ryan 21; “A Sailors’ Association” 6)。

船上の反乱者の造形における書き換えを通して、『ナーシサス号の黒人』がテキスト内に持ち込んでいるものとは、当時の労働者が組合運動を通して新しく獲得しつつあった〈声〉にはほかならない。それは、語り手が「穢らわしい雄弁」(“filthy eloquence,” 172) と揶揄するドンキンの〈声〉としてテキストの各所に入り込んでいる。嵐の場面で、アリストタンにビレーピンで脅されたドンキンがすすり泣くように発する「俺たちを殺そうってのか」という訴えは、反乱直前に発せられる「俺たちは機械だってのか」というドンキンの叫びへと、さらには反乱翌朝、ビレーピンを戻すようにアリストタンに命じられたドンキンが、彼の拳から身を守るように発する「殴らないでくれ…、治安判事の前に引っ張り出してやるぞ」(“Don’t yer ’it me. . . . I will pull yer up afore the magistrtyt,” 136) という懇願と

脅迫へとリンクしていく。

確かに、各々の場面を独立したものとして眺めれば、強力なアイロニーに取り囲まれたこれらのドンキンの台詞は、卑劣な怠け者が発する空虚な言葉にしか聞こえないかもしれない。しかし、アリストランに恫喝される前、ドンキンがすでに一等航海士のベイカー（Baker）に職務怠慢を理由に殴られ、「前歯を失って」（“did lose one of his front teeth,” 41）いることを忘れてはならない。さらに、アリストランは過去に自らの乗船において発生した暴動に際して、首謀者たちを「二日間殴り続ける」（“knocked them about for two days”）ことで——アリストラン曰く「とても簡単な」（“Very simple”）方法によって——鎮圧した経験を持つ（137）。もし実際にドンキンが——ロックスリー・ホール号事件の船員のよう——アリストランや航海士たちのことを治安判事に告訴したならば、彼らは禁固刑に処されていたかもしれないのである⁶⁾。

こう考えるとひとつの疑念がわき起こってくる。実はドンキンの「穢らわしい雄弁」こそが、ウォッチマン号事件の新聞記事において告発されているような、闇に葬られてきた——コンラッドというまさに商船の（元）船長によって——労働者の〈声〉のひとつではないかと。そして、船員たちが、激しい嫌悪感を抱きながらも「この至高の芸術家の弁に思わず興味を持って聞き入らずにはいられない」（“could not but listen with interest to that consummate artist,” 100）のは、彼ら自身もまた〈声〉を奪われ続けてきた労働者だからかもしれないのだ。

こうした細部は、互いに結びあわされることによって、語り手の用いる「穢らわしい」という修飾語を突き破り、ドンキンの「雄弁」の潜在的な正当性をテキストの中で芽吹かせる。言い方を変えれば、点描のように書き込まれた19世紀末イギリスの労働者をとりまく現実、私たちがテキストというキャンバスから目を離していくにつれ、初めに見えていた一方的な労働運動批判とは別にある真実をおぼろげに示し始めるのである。ナーシサス号という現実世界から隔絶された箱庭を、自らの理想とする懐古的政治性を実現する場として選びながら、コンラッドはそこに19世紀末イギリス社会のディテールを散りばめる。そうしたコンラッドのリアリティーへの固執は、その精緻さゆえに、そこに混じり込む労働者の〈声〉をあたかもノイズのように拾い上げ、結果として、テキストの政治性が変化しゆく時代との間に複雑な関係を取り結んでいることを露呈していくのである。

6) 加えて、嵐の場面においてマストを切ることを禁じたアリストランの判断の正当性も、実は大いに疑わしい。R・D・フォーク（R. D. Foulke）によると、激しい嵐に見舞われた帆船が横倒しになった場合、マストを切るというのは船体を立て直し、なおかつ船員たちの安全を確保するために必要な作業であり、当時の操船マニュアルにも記載された通常の手順であったという（114）。フォークが言うように、アリストランは、「見事なまでに素早い航路」（“brilliantly quick passage”）を実現しようとする自らの「秘めた野望」（“secret ambition,” 31）のために、船員たちの生命を危険にさらした可能性がある。

4. 向かい合う王立造幣局とロンドン塔

テキストの政治性は、ナーシサス号がロンドンに到着した後の結びの場面に向かって、その複雑さを加速させていく。上陸し、現代都市の真っ只中に放り出された船員たちを描き出すコンラッドの筆は、彼らを取り囲む過酷な現実をさらなる精緻さをもって拾い上げていくのである。例えば、商務省（Board of Trade）の高圧的な役人から給金を受け取るシングルトンは、署名をする段になって字が書けないことを露呈し、役人に嘲笑されながら帳簿に署名代わりにバツ印を書き込む（168-69）。さらには最終場面、「黒馬亭」（“Black Horse”）というパブに向かって、「光の洪水」（“flood of light”）に包まれた王立造幣局の前を歩く船員たちの「黒い一団」（“dark group”）は、人々が忙しく行き交うロンドンの喧噪の中、あたかも「漂流者」（“castaways”）のように立ち現れる（172）⁷⁾。確かに船員たちはここでも英雄であり続ける。というのも、造幣局の向かいにあるロンドン塔のまばゆい輝きに重ね合わせて想起される古の凱旋兵士たちの「闘う原型」（“fighting prototypes”）としてのイメージは、船員たちの行進をあたかも勝利者のそれのごとく華々しく飾るからである。だが他方で、造幣局を介して提示される「漂流者」としてのイメージにおいて、彼らは、活気あふれる商業都市ロンドンのただ中でさまよう、貧しく蔑まれた労働者にすぎない。商船の乗組員として、自らの命を賭しながら大英帝国の屋台骨を支える彼らを、誰一人として称える者はいないのである。

『ナーシサス号の黒人』に精細に書き込まれたこのような社会的現実、その下に置かれる労働者の生の困難さをまざまざとあぶりだす。単一の政治的主張を展開するはずのテキストは、そのリアリティーを追究する過程において、人間存在をシンプルな政治性に還元することの困難さを逆説的にさらけ出してしまっているのだ。言い換えれば、労働者を理想的な政治的枠組に閉じ込めようとするフィクションの語りは、歩みを進める船員たちを挟んでそびえ立つ造幣局とロンドン塔という二つの建築物のように、そうした枠組そのものに疑問を突きつけ続けるもう一つの隠された語りと向かい合わせになっているのである。

結果として『ナーシサス号の黒人』という極めて政治的なテキストの内部には、政治的な尺度をもって測ることのできない人間の生の複雑さが、あたかも二重露光した写真のように焼き付けられる。それはやがて、『闇の奥』（*Heart of Darkness*）のマーロウが直面する、政治と語りとの不可分性の認識、そしてその上で「語りきれないもの」をいかにして語るかという言語との真摯な取り組みとして結実していくものでもある。嵐の場面における一見シンプルに見える政治性が、反乱の場面を経て、さらに最終場面に至って複雑化し

7) 当時の王立造幣局（Royal Mint）は、商務省のあったセント・キャサリンズ・ドック（St. Katherine's Dock）の北、道路を挟んでロンドン塔（Tower of London）の東側に所在していた。造幣局そのものは1968年にウェールズに移転したが、現在でも建物は残っている。船員たちが向かっていた「黒馬亭」はすでに取り壊されており、道路の一部となっている。

ていく『ナーシサス号の黒人』とは、いわば、フィクションの言語が政治に供されることへの懐疑をコンラッドが抱いていった過程を記録する、一つのタペストリーではないだろうか。

参考文献

- “Caswell Mutiny.” *Penny Illustrated Paper and Illustrated Times* 20 May 1876: 339.
- “The Interest of the Lieges.” *New Review* 12 (1895): 605–11.
- “Police.” *Times* 28 Apr. 1876: 12.
- “A Sailors’ Association.” *Daily Telegraph* 25 Aug. 1887: 6.
- “The Sailor’s Hard Life.” *Reynolds’s Newspaper* 6 Aug. 1893: 2.
- Berthoud, Jacques. *Joseph Conrad: The Major Phase*. Cambridge: Cambridge University Press, 1978.
- Coates, Ken, and Tony Topham. *The History of the Transport and General Workers’ Union*. Vol. 1. Oxford: Basil Blackwell, 1991.
- Conrad, Joseph. *The Collected Letters of Joseph Conrad*. Eds. Fredrick R. Karl and Laurence Davies. 9 vols. Cambridge: Cambridge UP, 1983–2007.
- . *The Nigger of the “Narcissus.”* Oxford: Oxford University Press, 1984.
- . “To the Chairman of the Provisional Committee of the Henley Memorial.” *Collected Letters*. Vol. 3. 115.
- . “To Edward Garnett.” *Collected Letters*. Vol. 1. 322–23.
- . “To T. Fisher Unwin.” *Collected Letters*. Vol. 1. 308.
- . “To T. Fisher Unwin.” *Collected Letters*. Vol. 1. 329–30.
- . “To Spiridion Kliszczewski.” *Collected Letters*. Vol. 1. 15–16.
- Curtis, L. Perry, Jr. *Jack the Ripper and the London Press*. New Haven: Yale University Press, 2001.
- Dear, I. C. B., and Peter Kemp, eds. *The Oxford Companion to Ships and the Sea*. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press, 2006.
- Fleishman, Avrom. *Conrad’s Politics: Community and Anarchy in the Fiction of Joseph Conrad*. Baltimore: Johns Hopkins Press, 1967.
- Foulke, R. D. “Creed and Conduct in *The Nigger of the ‘Narcissus.’*” *Conradiana* 12 (1980): 105–28.
- Hampson, Robert. *Joseph Conrad: Betrayal and Identity*. New York: St. Martin’s Press, 1992.
- Marsh, Arthur, and Victoria Ryan. *The Seamen: A History of the National Union of Seamen, 1887–1987*. Oxford: Malthouse Press, 1989.
- McDonald, Peter D. *British Literary Culture and Publishing Practice, 1880–1914*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
- Pelling, Henry. *A History of British Trade Unionism*. 3rd ed. London: Macmillan, 1976.
- Stevenson, Robert Louis. *Treasure Island*. Oxford: Oxford University Press, 1998.
- Watt, Ian. *Conrad in the Nineteenth Century*. Berkeley: University of California Press, 1979.
- Watts, Cedric. Introduction. *The Nigger of the “Narcissus.”* By Conrad. Harmondsworth: Penguin, 1988. xi–xxx.
- Wiener, Joel H. “How New Was the New Journalism?” *Papers for the Millions: The New Journalism in Britain, 1850s to 1914*. Ed. Wiener. New York: Greenwood Press, 1988. 47–71.
- Willy, Todd G. “The Conquest of the Commodore: Conrad’s Rigging of ‘*The Nigger*’ for the Henley Regatta.” *Conradiana* 17 (1985): 163–82.

The Late Nineteenth-Century British Labour Movement and the Politics of *The Nigger of the “Narcissus”*

Masanori ITO

The attempted mutiny that takes place on a merchant ship bound for London serves as a landmark in the political outlook of Joseph Conrad’s *The Nigger of the “Narcissus.”* As many critics have discussed, the humiliating defeat of Donkin, its ringleader and the egoistic advocate of workers’ rights, appears to reflect the author’s own antipathy towards late nineteenth-century labour movements and to socialism.

However, such apparent political purport of the text, as spotted by focusing independently on a single episode of the novella, will be discovered to constitute only part of its complex politics. This is revealed if we pay attention to the subtle interrelations of episodes on an axis of shared elements. One of these is the belaying pin which Donkin throws at Captain Allistoun and the other officers in his attempt to instigate the mutiny: in spite of Allistoun’s accusing him for inappropriate use of the ship’s equipment, the captain himself has already used it as a “weapon” in forcing the insubordinate Donkin back to work during the storm. Another is Donkin’s voice: notwithstanding the narrator sailor’s renunciation of his protestations of rights as “filthy eloquence,” we notice that it is at least partially justifiable when we focus on the captain’s, as well as the officers’, violent treatment of sailors in other episodes. Further linked to the actual voices of the labour movement, which was rapidly increasing in influence through late nineteenth-century British society, Donkin’s “eloquence” establishes a right in the text beyond the control of its narrative.

Conrad’s effort to realise a consistent political position in the text is found to be in conflict with his own aesthetic aspiration to render realities in late nineteenth-century England, realities including a labour movement which had become too significant to be readily dismissed.